

レーザーコンパス

自主技術と創造性

中原 恒 雄*

Tsuneo NAKAHARA*

1980年代にはいつわが国の政治・経済は困難な局面を迎えている。第2次石油危機により不況下にインフレが進行し、石油代金の高騰から国際収支もたちまち赤字となった。またソ連のアフガン侵攻、イランの米国大使館人質事件、日米経済摩擦など国際政治問題がただちに日本の経済を根本からゆさぶるようになった。政府の各省庁や経済界、学界、各界の権威をあつめた会合が数多くもたれたようであるが、その結果、どうやら衆目の一致する所、これらの抜本対策は自主技術開発それも望むらくは自主産業振興しかないということになったと理解される。最近日本人の独創力についての論議がにわかに熱気をおびてきたのもこのような背景からであると思われる。

日本人の独創力についての論議は二つに分れている。日本人は先天的に模倣的民族であって独創性に全く欠けるとする悲観論と、日本人は現在まではそれ程多くの独創力を発揮できなかったが、それは教育やこれまでのやり方がわるかったのであるとする楽観論がそれである。これらの論議の有力な証拠としてしばしば引用されるのがノーベル賞受賞者の数の国際比較である。

しかし技術開発の実戦にたずさわる我々現役としては、これらの論議を聞く度に猛省させられるものの、同時に我々現役としては、何んともなくまだ土俵にも上らぬうちに相手方

軍配があげられてしまったような後味のわるさを感じるのである。たしかに過去においては日本の技術的業績は主として欧米よりの輸入技術を改良したものが多く、自ら創造したものは乏しかった。しかし一方では鎖国から開国後僅か百年余にして、欧米との生活格差をなくすることに成功した民族は日本人だけであったことも事実である。これまでの日本ではこの目標を達することに国民の誰もが疑いをさしはさむこともなく、まさにこれが全国民の永年の念願であった。またこの目標を達成する為の最も経済的で手っ取り早い最短のコースは欧米の技術を導入し、これを改良して輸出産業を興すことであり、その故にこそ最も理想的にこれが実行されてきたのであった。

したがって、今やもしも日本国民すべての念願が更に豊かな安定した高度の生活水準を獲得することであり、その為には創造性をもって自主技術を確立してゆくことが必須であるとの共通認識が得られるならば、必ずや日本人の独創性についての事態は大きく変るといふ期待もあるわけである。我々現役の気持ちとしては少くとも日本人の独創力の評価の論議は、十年、二十年のかかる試行錯誤の後にしてほしいのである。

最近「日本への頭脳流入」という見慣れぬ新聞記事が目にとまった。高エネルギー研究所の研究設備の計画のことをききつけたアメリカ人

* 住友電気工業株式会社取締役・研究開発本部長 (〒554 大阪市此花区島屋1-1-3)

* Sumitomo Electric Industries, Ltd., Director, General Manager R & D Group (1-3, Shimaya 1-Chome, Konohana-ku, Osaka, 554)

が、この設備を使って研究したいので日本に住みたいという希望を数多くよせているというのだ。かつて日本人の優秀な頭脳が数多くアメリカに流出し、実質的にノーベル賞に値する仕事をしながら、社会的に助手の地位しか与えられていなかった為に、リーダーをしていたアメリカ人が多くのノーベル賞をもらっている分野があるという話を聞いたことがある。真偽の程は知らぬが、研究設備と研究者の動機づけが如何に大切かということを感じさせられる話である。

一刻の猶予もならぬはげしい生存競争がくりひろげられる1980年代の国際経済社会において、実戦的に我々がとりうる対策は今や明白である。国としての経済力を蓄えつつ、従来とは異なる価値判断をもって独創的な研究を推進する為のさまざまな投資を行いこれを正当化することである。そして我々日本人の気質を充分ふまえて研究者に未知の世界への挑戦の動機づけをすることである。独創的であると否とを問わず研究成果を最も大きく左右するのは、若い研究者の能

力ではなく、政治・経済の実権を握るマネジメント層の価値観である。そしてマネジメント層の価値観を左右するのは、大多数の人々の、価値観なのである。

今後日本として育成が期待される最も有望な自主振興産業の一つに、本レーザー学会が深い関わりをもつ光産業がある。レーザー、光ファイバ、半導体等を有機的に結合したオプト・マイクロエレクトロニクス、そして新しいエネルギーを作り出すレーザー核融合やソーラーシステム、生体の神秘をさぐり、人命を救うバイオ・メディカル・オプトエレクトロニクス等光産業の未来は無限である。これらの分野こそ、我々が創造性をもって、また和と恥を尊ぶ日本人の研究者集団を動機づけして挑戦すべき未来の一大分野なのである。レーザー学会の使命たるや誠に重かつ大であるといわなければならない。十年、二十年後このレーザーコンパスで日本人の独創力が何故すぐれているかという卓見・高見が展開されることを切に念願する次第である。